先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学)
一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程
鈴木　良和

マイルズ・フェアバーン「断片的な証拠の問題へのいくつかの解決策」

Miles Fairburn, “Some Solutions for the Problem of Fragmentary Evidence”, *Social History: Problems, Strategies and Methods*, Macmillan, St. Martin's Press, 1999, pp. 58-84 (chapter3).

紹介

第二章に引き続き、断片的な証拠（事例研究）から集合性に関する主張を論証する際に生じる問題に対して、具体的な研究を参照しつつ五つの解決策を検討する。「致命的な事例」、「比較可能な事例からの外挿」、「観察の重さと多様さの最大化」、「対抗仮説の振るい落とし」、「状況の論理」が主要な解決策として検討される。

(１)「致命的な事例」(The crucial case, pp. 58-59)

・「致命的な事例」とは、選ばれている仮説に対して、本来的に反対のバイアスがかかっている体系的な断片である。

・「致命的な事例」は、事例の数からすれば小さな断片にすぎないかもしれない。だがそうした事例が、選ばれている仮説をくつがえすことを期待できる妥当な理由がある場合には、事例の典型性の問題を迂回することができる。

➡つまり、「致命的な事例」というのは、窃盗の罪で告訴された西インド諸島人が犯行の時刻に家にいたと、白人のレイシストの隣人が法廷で証言するようなものである。

(２)「比較可能な事例からの外挿」(Extrapolating from comparable cases, pp. 59-61)

・この方法は、比較可能な事例によって十分に裏付けのある研究（事例は同じ社会から取られたものでも、異なる社会から取られたものでもよい）に注目することで、少数の事例に基づく説明の証拠を拡大することを目指す。

〇この方法の具体例①

・近代以前の世界を研究する社会史家にとっては、社会人類学者による二十世紀の部族社会の研究が有益となる。これを利用したのが A. Macfarlane, *Witchcraft in Tudor and Stuart England.*

・マクファーレンは、エセックスにおける 460 件の魔女の告発の理由を一般化しようとした。すると、多くの事例において、以下のことが確認できた。

①魔女として告発された被告と原告は、緊密に結びついた村内部の隣人である。

②原告は被告よりも高い地位にあり、被告は共同体の慈善に依存している。

③事件の前に、原告は被告への援助を拒否することで慣習的な義務を侵犯している。

➡ここから導き出される説明は、魔女として告発することが社会的負担を解消するための方法だったというものである。マクファーレンは、この議論がエヴァンズ・プリチャードのアフリカの妖術に関する調査と適合していると示すことで、議論をより説得的にしている。

〇この方法の具体例②

・歴史家の研究対象と同じような現象に関して、近代の社会科学がもたらした適切な実験や調査データを利用することができる。これを利用したのが、Christopher Browning, *Ordinary men: Reserve Police Battalion 101 and the final solution in Poland* [1].

➡ブラウニングはホロコーストに関与した「ふつうの」ドイツ人警察官の集団を、戦争犯罪として告発された際の一連の証言に基づいて研究した。ブラウニングは集団の内部で同調圧力が働いていたと論じ、議論を補強するためにスタンレー・ミルグラム(Stanley Milgram)によって 1960 年代におこなわれた有名な服従実験の結果を利用した。

(3)「観察の重さと多様さの最大化」(Maximising the weight and variety of observations, pp. 61-74)

・この方法は、主張が真であることの蓋然性が支持事例の重さと多様さに比例して増加するという仮定に基づいている[2]。

・この方法の前提となる考え方は「全体論的存在論」(holistic ontology)である。ある集団やカテゴリーに属する人々は、物質、社会、人口統計、文化、政治、その他といった複数の次元、あるいは属性を有しており、これらはそれぞれ相互作用している。

➡ある一つの次元に関係する原因/結果の関係は、他のすべての次元に影響する。

・この研究方法は、はじめに「基本前提」(fundamental premise)に基づく「全体仮説」(overall hypothesis)を提示することによってスタートする。「基本前提」は「被覆法則」(covering law)、あるいは「説明スケッチ」(explanation sketch)の形式をとる[3]。

---

[1] 谷喬夫訳『普通の人びと: ホロコーストと第 101 警察予備大隊』筑摩書房、2019 年（増補版)。

[2] 著者は注で KKV に言及し、それが多くの良い技術について論じていると評価しつつ、ここではそれと異なる入念で刺激的な技術について論じるつもりだと述べている。

[3] 著者はここでカール・ヘンペルの語彙を用いている。「被覆法則モデル」についての詳しい説明は、社会科学の哲学／社会科学方法論分野の文献レビュー（Bishop「社会科学にお

①「被覆法則」
➡同じ諸条件のもとで人間行動のある側面がつねに生じるような確証された科学理論のこと。
②「説明スケッチ」
➡科学的には確証されておらず、不変ではない人間行動に関する一般則のこと。
※基本前提に基づく全体仮説のことを著者は「中核理論」(core theory)と呼ぶ。

・この研究方法は次の一連のプロセスによって実行される。
①集団やカテゴリーに関するできる限り多くの「補助仮説」(auxiliary hypotheses)を「中核理論」から推論によって演繹する（第一ベルト）。
②可能ならば、推論による演繹によってさらに後続のベルトを導き出す（第二ベルト）。
③さらに、第一ベルトと第二ベルトを混ぜることで第三ベルトを推論により演繹する[4]。第四も同様にしていく。図示すると以下のようになる。

中核理論	➡	第一ベルト 補助仮説 (物質的、社会的 イデオロギー的 文化的、人口統計的 な次元に関する)	➡	第二ベルト 補助仮説 (第一ベルトから 演繹される)	➡	etc.

・このプロセスの結果はさらに次の二つのテストにかけられる。
①他の補助仮説と両立不可能な補助仮説を削除する。
➡すべての補助仮説が同じ結論に収束しているかを確かめる。
②各補助仮説の支持事例を探すために資料を徹底的に調査する。
➡「経験的に擁護できない」(empirically indefensible)[5]補助仮説は削除するか修正する。
・この過程で、多くの支持仮説が削除されたり修正されたりする。その結果、中核理論そ

ける説明」(2007)）を参照のこと。

[4] 「中核理論」、「補助仮説」、「ベルト」などはイムレ・ラカトシュの語彙である。中核理論は、補助仮説から構成される防御ベルトによって守られることになる。イムレ・ラカトシュ（村上陽一郎ほか訳）『方法の擁護: 科学的研究プログラムの方法論』新曜社、1986年。

[5] 補助仮説を支持する実証事例が見つからない、あるいは満足に説明できないような反対事例がある場合を意味する。

のものを修正したり、放棄したり、もっとよい中核理論に置き換える必要が生じる場合もある。

・この戦略には次の二つのメリットがある。

①支持事例を引き出す非常に強力な方法である。

➡補助仮説は、わたしたちがどのような証拠を発見する必要があるのかを正確に教えてくれる。

②反駁困難な非常に説得力のある理論をつくりだす方法である。

➡一つの結論に収束するさまざまなタイプの証拠に裏付けされているので、そうした結論に反駁するためには、補助仮説のすべてか、あるいは大半に対して反証を見つけなくてはならない。

・この戦略には次の三つのデメリットがある。

①すべての補助仮説をつくりだすために非常に多くのことが求められる。

②断片的な証拠がきわめて貧しい場合には多くのことはできない。

③反対事例を探し出す方法については教えてくれない。

〇この方法の具体例

・Lawrence Stone, *The crisis of the aristocracy, 1558-1641*.この本の主題は、1558 年から 1641 年にかけてのイングランド貴族の衰退である。この研究の論点は、上記の概念を使って次のように表すことができる。

・「基本前提」：社会全体において圧倒的に重要だったのは地位(status)という概念だった。地位は権力と富の基盤だった。言い換えれば、地位こそがこの時期の社会の主変数(master variable)だった。

・「全体仮説」：イングランド貴族はこの時期に、とくに地位における衰退を経験した。貴族衰退のカギとなる原因は、社会におけるほかのカテゴリー（もっとも重要なのは、貴族のすぐ下に位置するジェントリである）からの敬意が失われたことであった。

・「補助仮説」（第一ベルト）：

①貴族が所有する富が、ジェントリのそれと比べて減少した。

②小作の規模が相対的・絶対的に縮小したことで、貴族に従属する人の割合が減少した。

③土地資産の減少と増加した浪費を補うために小作料を引き上げることによって残った小作人の視点からも貴族は失墜した。

④暴力と強迫による畏怖のうちに保持されていた貴族の力は、軍事力の縮小により弱

まった。

⑤王権が金銭と引き換えに貴族の新しいタイトルを数多く作り出したことで、貴族への敬意が損なわれた。

⑥宗教的、政治的問題が議会の選出に与える貴族の力を弱めたことで、貴族の名声が傷つけられた。

⑦地方でのホスピタリティを減らし、ロンドンにおける顕示的消費に出費を移すことで、地方において貴族の気前の良さや寛大さの評判が傷つけられた。

⑧教育が普及し功績主義という新しい観念が現れたことで、高貴な生まれに伝統的に結びついてきた社会的な敬意が損なわれた。

⑨服従の慣習的な形態を引き出す力は、個人主義、カルヴァン主義、ピューリタン主義といった新しいイデオロギーの登場で損なわれた。

⑩土地から得られる富が減少し、貴族は代わりの収入減を宮廷に求めたために、宮廷の不評が増すと貴族そのものの人気が曇らされることになった。

・「補助仮説」(第二ベルト):この例では第一ベルトの補助仮説④から導き出されている。
社会が暴力的でなくなったのは・・・

①15 世紀後半から 16 世紀末にかけて、従おうとしない有力者を制御、打倒する王権の長期的なプログラムが成功したから。

②エリザベス 1 世が貴族の争いを解決することに著しく成功したから。

③自然的原因により 16 世紀にいくつかの非常に強力な貴族家系が途絶えたから。

④宮廷生活や顕示的消費に貴族の活力、才能、競争本能が向けられるようになった結果、貴族自体が戦争への好みを失ったから。

⑤貴族の軍事技術は使われないために衰えたから。

⑥統治に従事する、宮廷に仕える、という新しい観念の展開によって貴族の戦争への関心が弱まったから。

⑦致命的な武器であるレイピアの導入により貴族は決闘をしにくくなり、暴力なしで争いを処理する規則が作られたから。

⑧小作料を上げることで小作人の忠誠が弱まり、さらに土地をジェントリに売ったことで小作人の数が減ったために、軍事的支援を小作人に求めづらくなったから。

⑨ピューリタンの教義の影響によって、貴族は自己抑制の習慣を学び、急に激怒したり、突発的な暴力行為に及ぶことが減ったから。

⑩中世的な名誉のコードは、貴族が侮辱に対して敏感に反応するようにしたが、それは机上の学問に次第に置きかえられていったから。

⑪プライバシーや正規教育といった新たな潮流の影響を受けて、ジェントリは貴族の家で武装した臣下として仕えようとはしなくなったから。

・ストーンにみるこの方法の限界と利点。
・限界点は以下の通り。
①完全な意味では、貴族が地位において衰退したことを証明できていない。
②彼が持ち出す証拠は、典型的かわからない支持事例に基づいているために、衰退の十の原因（第一ベルト）が存在したことを証明できていない。
③衰退を引き起こすには、十の原因で十分だったということを証明していない。

・利点は以下の通り。
①非常に多くの論証に基づいているため、論駁するのがかなり困難な主張を提示できている。中核理論を批判するためには、すべての補助仮説をくつがえす必要がある。
②おなじ結論に収束する非常に多様な支持事例の発見を可能にしている。それぞれの原因は、典型的かわからない支持事例に基づいているとはいえ、事例が非常に多様であるために、全体仮説の重さを大いに高めている。
③社会的エリートの全体的な環境をみごとに明るみに出す、歴史のすばらしい一断片を生み出している。洗練された厳格な方法と、刺激的でおもしろい歴史が両立できている。

(4)「対抗仮説の振るい落とし（仮説演繹法/最善の説明のための論証）」(Eliminating rival hypotheses (the hypothetico-deductive/argument to the best explanation) pp. 74-81)

・この方法は次の手順で実行される。
①一つの主張を裏付けする補足的な証拠を探し出すかわりに、一連のもっともありえそうな対抗する主張を特定していく。
②それぞれの主張の帰結を推論によって演繹する。
③それぞれの主張の帰結に対するすべての実証事例と反対事例を探し出す。
④どの主張がもっともありえそうか、すべての主張を徹底的に評価する。
⑤もっともありえそうな仮説を決定する。しかし、それは臨時的なものであって、つねにもっとよい仮説を探そうとしなければならない。

・候補仮説は研究を始める前にあらかじめ準備しておくのがよい。
➡どのような実証事例を探すべきかという考えをもって研究を始めることができる。

・調査の途上、新しいデータと出会うことで仮説を変更する用意をしておく必要がある。
・この方法の最大の効力は、例外をまっとうに扱うことができること。
➡社会(social world)は非常に複雑で例外を多く生み出す（この現象は専門的に、「すべての

仮説は過少決定である」(underdetermined)といわれる)。例外は簡単に見つかるが扱いは難しい。対抗仮説を振るい落としていく方法はこの困難を小さくしてくれる。

〇この方法の具体例

・Carlo Ginzburg, *The Cheese and the Worms: The Cosmos of a Sixteenth-century Miller*[6].
北イタリアのフリウリ地方の粉挽屋メノッキオの世界像を異端審問記録から探ろうとした研究。ギンズブルグの目的は、書字の文化と口頭伝承の文化の一方通行ではない往還関係があった可能性を強調すること。そのための方法は、メノッキオをテストケースとして、メノッキオの書字の文化への応答が口頭伝承に条件づけられていることを示すことだった。

・メノッキオは次のように証言した。
「すべてはカオスである・・・。この全体は次第に塊になっていった。ちょうど牛乳かチーズができるように。そしてチーズの塊からうじ虫が湧き出るように天使たちが出現したのだ。そして至上の聖なるお方は、それらが神であり天使たちであることを望まれた。これらの天使たちのうちには、それ自身もこの塊から同時に創造された神も含まれている」[7]。
➡これは尋常でない異端。

・メノッキオが読んだ本（聖書、信心書、暦書、『デカメロン』、マンデヴィルの旅行記、コーラン）とメノッキオの証言との関連部分を比較し、注意深く両者の類似と差異を取り上げていく。このギャップ（メノッキオがどのように本を読んだか）がメノッキオの世界観を明らかにする重要なカギとなる。

・だが、メノッキオが本を解釈したときのバイアスはどこから来ているのか？ギンズブルグはこの問いへの答えとして次のような仮説を立てる。「これらの主張や願望は、はるかむかしにさかのぼる農民社会の伝統の暗く闇に閉ざされた、ほとんど解読不可能な地層のうちに深く入り込んでいる」[8]。

・この主張を論証するためにギンズブルグは次の二つの手続きをおこなう。
①観察の多様さと重さを最大化するために、次の二種類の観察がおこなわれる。
　１．メノッキオの言語使用に関する観察。
　➡メノッキオの語彙が農民の日常的経験の言葉づかいから引き出されていることが

---

[6] カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫: 16 世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房、2012 年。
[7] ギンズブルグ、邦訳 52 頁。
[8] ギンズブルグ、邦訳 26-27 頁。

示される。

２．メノッキオの同時代人の類似例に関する観察。

➡数人の独学の北イタリア人（そのうちの一人は、粉挽屋でメノッキオのように異端審問にかけられた）は、メノッキオと同じいくつかのテクストを読んでいただけでなく、メノッキオと同じような仕方で重要な文章やテーマを解釈していた。

②選ばれている仮説と競合する仮説を提示しその欠陥を示す。たとえば、次の四つの仮説をギンズブルグは取り上げている。

１．メノッキオは狂人だった。

➡メノッキオは真剣で正気だったと証人が述べている。

２．メノッキオの「解釈格子」は再洗礼派運動（メノッキオの考えと共通する要素が多数みられる）の産物だった。

➡再洗礼派と根本的に相いれない要素が多くある（例えば、再洗礼派にとって真実の源泉は聖書のみであるのに対し、メノッキオにとって聖書はさまざまなテクストの一つに過ぎない）。

３．メノッキオのテクスト読解の方法は「漠然としたルター主義」(generic Lutheranism)によって形成された。

➡メノッキオはルター主義の重要な教義を理解していなかった。

４．メノッキオの考えは、彼と同じような独学の異端者との接触から生じた。

➡メノッキオの本の扱い方や、ゆがんだぎこちない供述は、その考えがオリジナルであることの確かな証拠となっている。

(5)「状況の論理」(Situational logic, pp. 81-83)

・行為者がある方法で行為した意識的な理由、あるいは意図を説明するのに役立つ。カール・ポパーの状況論理モデル（situational logic model）を参照している。

・ポパーのモデルの二つの前提。

①行為者が行為する理由は適当であるという前提。

②行為者個人が直面する特定の状況に、行為者の観点（目的や世界観）から注目するという前提。

➡こうした前提から、このモデルは観念上の理性的な行為者が同じ状況で何をするかというところから、特定の行為者を行為に導いた特定の理由を推測する。

・行為者がある状況にもちこむ価値や信条を理解することができれば、ある行為へと導く特定の理由についておおよその考えを得ることができる。

・そうした価値や信条を理解する鍵となるのは、社会の文化を知ることである。なぜなら、文化は社会のメンバーにどのような価値や信条を持つべきなのかというルールと、これらを特定の状況にどう適用すべきなのかというグラウンド・ルールを与えるものだからである。

➡価値や信条を統御する社会のルールを調べることによって、特定の状況における行為者の理由を再構築する。

・以上の五つが断片的な証拠の問題を扱う際に取り得る方法である。